アルマトゥの暮らしから

坂井　弘紀

はじめに

2013 年 4 月から、勤務大学のサバティカル休暇（在外研修）の制度を利用して、カザフスタンの中心都市アルマトゥに住んでいる（写真 1）。筆者がカザフスタンを初めて訪ねたのは 1991 年、まだカザフ・ソビエト社会主義共和国と名乗っていたころであった。その後、1995 年から 96 年にかけて、在カザフスタン日本大使館の専門調査員として、この地に暮らした。それ以後も幾度となくこの町を訪ねているが、今回の訪問は 6 年ぶり、長期間居住するのは 18 年ぶりのことである。この間、この町も大きく変わった。かつて住んでいたころ、アルマトゥはカザフスタンの首都であったが、1997 年にアスタナにその座を明け渡し、現在は「南の首都」として、とくに経済や文化の分野で、変わらず日々発展を続けている。これから、カザフスタンの現況について、アルマトゥでの生活で大きく変化したと感じることを徒然に綴っていきたい。この雑文が読者にとっていささかの参考になれば幸いである。

写真 1.　自室からの風景

町中の大きな変化

6 年ぶりのカザフスタンで、まず驚いたことは、ATM が街中に点在していることである。筆者は、MoneyT Global というカード (www.jtbmoneyt.com/g/) をもちいて、必要なだけ送金し、使う分だけのテンゲを下ろしている。このカードはあらかじめ振り込んでおいた分しか引き出すことができない仕組みのため、残高を調整していれば、万が一紛失しても被害が少ないという点で、クレジットカードよりも安全性が高い。ATM の種類にもよるが、アメリカ・

ドルも下ろすことができ、一回の引き出しで 200 円の手数料がかかるものの、なかなかに便利である。もっとも、ATM の種類や設置場所、引き出す日時などによって、一回の最高引き出し金額が 10 万テンゲであったり、3 万テンゲであったりと、自分の利用に適した ATM を見つけ出す必要がある。

また、ipod などの音楽デバイスや携帯電話、スマートフォンの普及にも驚いた。町中にはイヤフォンで音楽を楽しむ若者が多く、子供から老人まで、みな携帯電話を使っている。携帯電話の普及率は日本並みかそれ以上であると感じるほどである。バスに乗っていると、あちらこちらで様々な音色の呼び出し音や着信メロディーが鳴り、それに応じる声が車内に響く。カザフスタンでは、車内通話はとくにマナー違反とはされていないようである。日本と違ってなにより便利なのは SIM 方式であることだ。安い機種本体を購入し（安いものは 3,000 テンゲほどからある）、SIM カードを入れればすぐに使える。日本のシステムの方が世界的に見ると異端なのだろう。通話料・使用料は、町の至る所に設置されるタッチパネル端末を使って補充することができ、これもまたたいへん便利である。あとで使用料金の明細を見て、驚くことなどありえないのだ。

町中では、自転車やバイクが以前よりも増えた。夏季は自転車を利用する人が多く、とくに子供たちの間で人気の趣味・娯楽となっている。アバイ通りなど、自転車専用レーンが設置されているところもあるが、山がちで坂の多いアルマトゥを歩行する際には、疾走する自転車への注意が必要である。また、雨の日には傘を差す人が増えたように感じる。カザフスタン（旧ソ連）の最初の訪問で思ったことは、雨の中、傘を差す人がほとんどいないということであったが、現在のアルマトゥではデザインもよく、値段も高そうな傘を差す人が多い。これも生活に余裕が出てきたことの表れだろうか。（もちろん、小雨でもほとんどの人が傘を差す日本ほどではない。これは天気にたいする文化の違いであろう。）

カザフ語の現在

カザフスタンでは、カザフ語が使われる機会が以前にも増して多くなっていると感じる。これは国家語としてのカザフ語の使用を徹底しようとする政府の方針によるものだが（ナザルバエフ大統領が提唱する「2050 年までの国家戦略」では、2025 年には 95％のカザフスタン人がカザフ語を習得していなければならないとされる）、実際にカザフ語の話者数が増えているためであろう。町の中心でも、以前よりもカザフ語を耳にすることが多いように感じる。住民構成にもよるが、町を少し外れれば、ほとんどカザフ語しか使われない地区もある。もちろん、カフェ（レストラン）などでは、基本的にロシア語が共通語として用いられ、まだまだロシア語の役割は大きいが、公共施設ではカザフ語が一般的になりつつあり、市場や

売店ではいきなりカザフ語で話しかけられることも多い。カザフ語をほとんど話せない（話さない）カザフ人もまだ少なくないが、今後そのような人の割合も減少していくように思われる。なお、カザフスタンの民族構成は、カザフ人 63%、ロシア人 24%、ウズベク人 3%、ウクライナ人 2%などとなっている（2009 年）。

また興味深いことは、カザフ語の「純化」による新語の創出と利用実態の隔離である。現在、カザフスタンではこれまでロシア語からの借用語として使ってきた言葉を「純粋な」カザフ語で表わす作業が進んでいる。たとえば、キャベツはロシア語の капуста にたいして、қырыққабат（「40 層」）や орамжапырақ（「包の葉」）などという「新語」が正しいとされ、ロシア語に基づく помидор（トマト）は、қызанақ（「赤いもの」）に取って替えられた。同様の例として、年金 зейнетақы（пенсия）、宇宙飛行士 ғарышкер（космонавт）、ロケット зымыран（ракета）、公園 саябақ（парк）、ピアノ күйсандық（рояль）などが挙げられる（カッコ内がロシア語の借用語）。しかし、多くの人がこれらの新語ではなく、ロシア語由来の単語を使っているのが現状である。典型的な例としては、新語の ұшақ（飛ぶもの）や ғаламтор（世界網）ではなく、それぞれロシア語の самолёт（飛行機）、интернет（インターネット）が一般的に使われる。筆者は、あるシンポジウムで「火山」を巡る研究者同士の議論に接した。ある研究者が火山をカザフ語の жанартау（「燃える山」）で表現したのだが、これに対し、別の研究者がそれは分かりにくいため、一般的に使われるロシア語の вулкан を使うべきだと主張した。すると、現在の正式なカザフ語は жанартау であるとの反論があった。この議論が示すように、現在、カザフ語はどの言葉を使うべきか、コンセンサスが定まらぬ混乱した過渡期にあるといえよう。

さらに、現在カザフ語の表記にはキリル文字が使われているが、カザフスタンでは 2025 年からラテン文字の使用を計画している。どのようなアルファベットにするか、これまでの表記法で問題とされている点については、どのように表記するかなど、解決すべき問題も多く、今後の成り行きが注目される。

口頭伝承の新しい形（書店事情とともに）

筆者の研究上の専門は、英雄叙事詩を中心としたテュルクの口頭伝承である。今回の在外研修では、それに関連した原稿の執筆やテキストの翻訳、聞き取り調査や叙事詩の語り手との面談、様々な資料収集などを行っているが、こうした研究活動とは別に、毎日の生活で口頭伝承にまつわる様々なものを目にする機会が以前よりも多くなった気がする。英雄叙事詩『エル・トシュティク』や昔話『アルダル・コセ』のアニメーションは、テレビでしばしば放送される。これらは DVD 化もされている。書店では、叙事詩や昔話に基づく絵本が多く

売られている。中には朗読した CD が付録されたものもある。アウトドア用品の店名「アルパムス」や菓子店の「バヤン・スルー」など、叙事詩の主人公の名を関する店も街中でよく目にする。筆者が驚いたのは、カザフの伝統料理ベシュバルマクのインスタント・パスタ（現在のカザフスタンではこのようなものまで売っているのである！）の商品名「エル・トシュティク」をスーパーで目にした時である。もちろん購入し、馬肉腸詰カズと調理し、試してみた。地下世界で活躍し、世界樹から聖鳥に乗って地上に戻る勇士トシュティクの存在は、その味からはもちろんまったく伝わらなかったが。

また書店では、100 巻からなるカザフ口承文芸の大全集『ババラル・ソジ Бабалар сөзі』（祖先の言葉）が一コーナーを占めていた。このシリーズは様々なカザフ口承文芸のジャンルのテキストをまとめたもので、研究上もきわめて重要な資料であり、画期的なプロジェクトである。とはいえ、やはり書店でのカザフ語書籍が占める割合は大きいとはいえない。また、以前よりも良質な学術書が少なくなっているという印象をもった。もちろんネット上では、様々な書店がカザフ語書籍を扱っており、検索して容易に購入することができる。こうしたネット販売の隆盛による流通のあり方の変化も、その背景にはあるのかもしれない。なお、筆者がよく利用する書店は、フルマノフ通りに二店舗ある、ソ連時代からの老舗のアカデミ・クニーギ書店やアバイ通り・フルマノフ通りのアルマトゥキタプ書店（www.almatykitap.kz/pages/31.jsp）、グリャンダ書店（www.gulyanda.kz/）である。グリャンダ書店（写真 2）は、シェフチェンコ通り・バイトルスノフ通りなど、いくつかある店舗の中で、トレビー通り・シャリポフ通りの店舗が品揃えも充実している。このほかに、ショッピングセンター・メガ MEGA の近くにある「本の町」書店 Книжный Город（www.bookcity.kz/）は規模が大きく、学術書も多い。またアバイ通りのマサンチ通りバス停近くにある「家族の本の世界」書店（2 階）はカザフ諸部族の系譜（シェジレ）をはじめ、カザフの歴史や文化関係の良書が多い。多くのチェーン展開をしているメロマン Meloman も書籍を販売するが、学術書は少ない。メロマン（www.meloman.kz/）は CD や DVD を購入するのにいいだろう。現代カザフ音楽やカザフ民謡、英雄叙事詩の語りなどの CD やコンサートやカザフの古今の映画の DVD も売られている。なお、バザール近くなどの路上でも CD や DVD を格安で売っているが、これらはみな海賊版である。

写真 2.　グリャンダ書店

アルマトゥの古書店の数は、本当に少なくなってしまった。ずっと昔に通っていたゴーゴリ通り・セイフッリン通りの古書店には、かつて多くの稀覯書を売っていたが、残念なことに現在では教科書など新刊書の書店となってしまった（現在はアルマトゥキタプ書店、ダス

タン店)。ニコリスキー・バザール（バイトルスノフ通り・カラサイ通り）内に数か所ある古書店では、まれではあるが掘り出し物がある。筆者は1960-80年代の入手困難な古書を何点か見つけることができた。

このような状況の中、筆者は学術書を大学教員や研究者から直接いただくことが多い。今後は店頭での購入よりも、ネット書店や研究者同士のつながりで入手するのが確実になっていくだろう。なお、友人の大学教員の話によると、カザフスタンの大学も業績主義的な志向が強まってきており、より多くの研究成果の公表が求められているようである。また独立予算型の科研費的研究プロジェクトが中心になりつつあり、「役に立つ研究」が要求されるようだ。長い時間をかけてじっくり研究するというスタイルは、現在ではいずこにおいても難しいのかもしれない。

アルマトゥの交通事情

アルマトゥに暮らしていて、いつも「日本とは違う」と感じることは、老人や女性、弱者にたいするいたわり・マナーである。たとえば、バスの中では若者はごく自然に席を立ち、老人や障碍者に席を譲る。別に譲る必要はないのではないかと思ってしまうような人（中年女性が多い）にも、席が譲られる。座っている人も重い荷物を持つ人に声をかけ、荷物を膝の上に乗せる。階段や交差点では、声をかけることもなく自然に手をとって補助する。日本では、勝手に触るなと叱られるか、怪訝なまなざしを受けるのではないかと思われるようなしぐさが、習慣・マナーとなっているのである。先日たまたま、これまで一度も席を譲られたことがないという妊婦の発言を巡る日本人同士のネット論争を見たが、譲らないことを正当化しようとするコメントの多さに情けなくなってしまった。日本人は本当にマナーが良いのだろうかと自問する機会がここでは多い。

見知らぬ者同士が自然に話をすることも珍しくない。タクシーやカフェ（レストラン）などではたいてい誰かと雑談をすることになるが、これは筆者が外国人であるからだけではないだろう。日本、とくに東京と比べて、他人との垣根が低いように思う。もっとも、初対面でありながら、「年齢はいくつだ、結婚はしているか、子供はいるのか、月給はいくらだ」と根掘り葉掘り聞かれるとうんざりもしてしまうが、これも文化の違いだと納得するようにしている。

バスの中の譲り合いや気遣いの一方で、理解しがたいのは、交通のマナーの悪さである。どの車も運転は概して荒く、無理な割り込みやクラクションの乱打は日常的である。信号が変わってすぐに発進しないと、たちまち後続車両からのクラクションが鳴り響く。乱暴な運転のため、交通事故は多発し、何度も事故車両を目にした。細かくハンドルを切り、急発進

と急ブレーキを繰り返す荒い運転は、なるほど騎馬民族の末裔ゆえと考えるのは、贔屓目に過ぎるだろう。こうした事情を背景に、歩行者が横断中の横断歩道では一時停止をすることが徹底されてきている。これは以前とは大きく異なることで、横断歩道で一時停止されると面喰ってしまう。なお、アルマトゥ中心部のほとんどの信号には、切り替わりまでの残り秒数が電光表示されるようになった。また飲酒運転にたいしてもかなり厳罰化されているようで、友人の大学教員は飲酒運転をすると大学にいられなくなると言って、車で訪ねた我が家での宴ではアルコールを一滴も飲まなかった。残念であったが、これは当然であり、やむを得ないことである。

公共交通機関の現状についても触れておこう。庶民の足であるバス、トラムバイ、トロリーバス、そして 2011 年に開業した地下鉄は、いずれも 80 テンゲ（約 50 円）である（2012 年に 80 テンゲに値上げされた）。バスは車内に発券機のついた車両も増えているが、以前のように車掌が同乗する車両もまだ多い。その場合、車掌に乗車賃を払い、切符をもらうが、大体は降車時に車掌に払う。混雑時には、昔から行われているように、運賃を乗客たちのリレーによって払うこともある。バスの運転も荒く、つり革や手すりにしっかりつかまっていなくてはならない。ドアを開けたまま発進することもあるので、ヒヤリとすることもある。バス停には、次のバスの到着まであと何分かを示す電光掲示板が付いているものもある。たとえば、中央スタジアム停留所がそうであった。なお市内をどの公共交通機関で移動するとよいかは、インターネットサイトで簡単に調べることができる（http://wikiroutes.info/almaty、および http://2gis.ru/#!/almaty/center/）。このサイトは、出発地と行き先を指定すれば自動的に適切な交通手段を示してくれ、たいへん重宝している。

写真 3.　地下鉄ジベク・ジョル（シルク・ロード）駅

開通したばかりの地下鉄（写真 3）は、新しくきれいで、フルマノフ通りとアバイ通りの市内の主要な場所を通るが、地下奥深く下りる上に、まだ 7 駅しかないため、それほど一般的にはなっていない。もっとも、近年増え続ける自動車による交通ラッシュの激しい地上交通に替わる手段として期待され、路線の延長計画は続き、今年 2014 年中にも、サイラン駅（ブルシロフスキー通り）とモスクワ駅（アルトゥンサリン通り）の開業が予定されている。

タクシーも重要な交通手段であるが、今でもその多くは「白タク」である。正規のタクシーもあるが、メーターをきちんと作動させることは珍しく、「白タク」同様、基本的に乗車前の値段交渉で乗車賃を決める。白タクは、目的地や時間にもよるが、数百テンゲ（200 ～ 500 テンゲ）が標準的である。ただし運賃は、最近上昇傾向にある。アルマトゥは、自動車

の増加によって、とくに夕方のラッシュがひどく、通常の倍以上の時間がかかることもあるので注意が必要である。交通量が多く、混雑・渋滞するアルマトゥも少し郊外に行くと、馬に乗った牧民やロバの荷車が自動車と並走し、羊や牛の群れが道路を遮る、懐かしい変わらぬ光景が見られ、思わずホッとする。

アルマトゥの買い物事情

買い物はバザールやスーパー、家の近くの小さな店ですることが多い。とくにスーパーマーケットは以前よりもかなり増えた。トルコ資本のラムストールは少々高めであるが、よい品質の商品が多く、SMALL は庶民的な価格設定で利用しやすい。いくつか価格の例をあげると、パン 50 ～ 100 テンゲ、米 400 グラム 200 ～ 300 テンゲ、即席麺 40 ～ 200 テンゲなどである。（トレビー通り・ナウルズバイ通りの Silkway City、中央スタジアム近くの Promenade、ドストゥク通りのロシアスーパーもよい）。韓国食材店も多く点在し、豆腐やみそ、醤油、顆粒だし、冷凍魚介類、即席麺、キムチ、海苔・わかめなど日本人の口になじむ食品も手ごろに買える。

一般的な食料品はバザールで買い物することが多い。アルマトゥを代表するコク・バザールをはじめ、ニコライ教会脇のニコリスキー市場、中央モスク北側、ラユムベク通りのバザール、アクサイ地区のアルスタン・バザールなどはいつもにぎわう庶民的なバザールだ。ニコリスキー・バザールはこじんまりとしているが、シシャモ（мойва 美味！）やイカ、鮭など冷凍の魚介製品はここで買っている。コク・バザールでは、牛肉 1 キロ 1,000 テンゲ、馬肉 2,000 テンゲ、豆腐 400 テンゲなどで購入できる。このバザールは中央のメインの売り場よりも、地下や裏（マカタエフ通り側）の方がリーズナブルである。バザール西側の小店舗では種々の雑貨も売られる。日本の 100 円ショップならぬ、50 テンゲショップがあり、筆者もよく利用する。ちなみに、コク・バザールには隣接する老舗製菓店ラハトからチョコレートの匂いが漂う。それほどヴァリエーションの多くないカザフスタンのおみやげに適したラハトのチョコレートは、品揃えが豊富なここの販売コーナーで求めるとよいだろう。ちなみにこのラハト製菓はロッテに買収されてしまうとのことである。

しばらくバスに揺られる必要があるが、アルマトゥの北はずれにあるバラホルカは広大で、あらゆる商品のあふれるアルマトゥ最大級の市場である。建材から乾燥果物まで売っていないものはないほどで、中国製品を中心とする外国製品が市内中心部よりも安く手に入る。もっとも、ここを新たな商業施設とする再開発計画があり、すでに店舗の撤去が徐々に始まっている。昨年この市場であった数回の火災も、再開発計画と何らかの関係があるらしいという物騒な噂も聞いた。

家電量販店もチェーン展開し、店舗数を増やしている。テクノドーム Texnodom やスルパク Sulpak がその代表である。日本の家電量販店と同様の、品種別の商品展示がなされた店内は整然とし、買い物しやすい雰囲気である。筆者は新年の初売り特売で、ロシア製のタブレット型 PC を 9,900 テンゲ（約 6,500 円）で購入した。テレビ広告も頻繁に流されている。

写真 4.　エセンタイ・モール

カザフスタン経済の好調さは、各地に開店する高級ブティックの入ったショッピング・センターの多さに象徴される。その代表例はアル・ファラビー通りにあるエセンタイ・モール（www.esentaimall.com/）であろうか。冬のアジア大会で使われたスキーのジャンプ台の前にそびえるこの建物は、入るのに一瞬躊躇するような威圧感さえ持つ(写真 4)。それよりも幾分庶民的な大型ショッピング・センターのメガ（http://almaty.megacenter.kz/rus/）も家族連れやカップルでにぎわい、店舗内に設置されたアイススケート場やフードコートも人であふれる。筆者の住居近くにはドストゥク・プラザという大型ショッピング・センターが近く開店する予定だ。こうした店で販売される商品、たとえば有名外国メーカーの衣料品の値段は、日本の販売価格の 1.5 倍ほどであるが、購入者はそこそこいるようである。

買い物のあり方も大きく変わった。ポストにはスーパーのチラシが入るようになり、クーポンを使ったお得な買い物方法も一般的になりつつある。インターネットサイト BeSmart（http://besmart.kz/events/）は、多種多様の商品をディスカウントするクーポンサイトで、筆者もよく利用した。たとえば、アルマトゥで身近に自然を感じることのできるシュンブラク（冬場はスキー場となる）のリフト代は 3 割引で購入できた。もっとも、チケットはプリントアウトしなくてはならないので、プリンターがない場合は町中にあるコピー屋で印刷する必要がある。

ちなみに、演劇やコンサートなどの催し物はネットでも簡単に席を選べ、ネット上でチケットを購入できる（Zakaz biletov（http://zakazbiletov.kz/））。筆者は、これまで『アバイ』、『クズ・ジベク』、『エル・タルグン』、『ビルジャンとサラ』などの伝統的文学に基づくカザフ・オペラや『後宮からの誘拐』、『バフチサライの泉』、『白鳥の湖』などの有名なオペラやバレエのチケットをこのサイトを使って、購入した（シーズンは秋から春にかけてである）。なお、コンサートなどの催し物は、サイトでも調べることができる（http://afisha.kz/news/culture/）。

インターネットに関して言えば、筆者は、Beeline という業者と毎月 3,900 テンゲでインターネット接続を契約している。室内では無線 LAN でネットにつなぎ、とくに不自由ないネット環境となっている。また、テレビはケーブルテレビで、多くのチャンネルを見ることが

できる。カザフスタンの放送局の番組は、ドラマ、歌番組、お笑い番組、クイズ、アニメ、ニュース、トーク番組と豊富で、飽きることがない。どの番組も 12 歳以上や 6 歳以上など視聴年齢制限が細かく設けられており、番組はこれを知らせるアナウンスで始まる。とくに印象深い番組は、伝統的な騎馬競技コクパルの中継番組である。馬に乗りながら羊を奪い合い、ゴールに運び入れるこの競技では、選手は背番号の付いたユニフォームを着て、審判の判定のもと戦う。実況と解説のあるこの番組は伝統的競技の現代的な形として、印象に残った。

食文化の変化

食文化もまた、以前と比べて大きく変化したと感じたことである。カザフスタンに限らず、中央アジアの料理といえば、プロフ（ピラフ）やカワプ（ケバブ・シャシリク）、ラグマン、マントゥが有名だが、これらの種類が大変豊富になった。ファーストフードとしてのカワプは、トルコ風のドネル・ケバブに取って代わりつつあると言っていいだろう。もちろん、バーガーキングやケンタッキー・フライド・チキンなどのファーストフード店もあるが、いまやトルコ風のドネル・ケバブのスタンドは町中にあふれ、広く利用されている。250 ～ 500 テンゲほどと安く、ボリュームもあり、庶民にはありがたい軽食だ。トルコのものよりもおいしく、リーズナブルと感じるのは気のせいだろうか。もちろん、串焼きのケバブも、とくに夏場にあちらこちらのオープンカフェでビールとともに楽しむことができ、しっかり食べたいときにはこちらがおすすめである。串焼きもビールも、ひとつ数百テンゲである点もうれしい。

写真 5.　ラグマン（新疆風）

ラグマンの種類が非常に増えたことも歓迎すべき点である。とくに新疆風と銘打った汁の少ないラグマン（グイルー・ラグマンとスイルー・ラグマンが代表的である）がいまや主流となったといってもよいだろう（写真 5）。かつての主流であった汁の多いラグマンは「家庭風ラグマン」・「汁入りラグマン」などとして供されるものの、どこか肩身が狭そうである。

町の至る所に見られる食堂カガナトは日常的に利用されている、カフェテリア式の食堂である。リーズナブルな値段であるが、あれもこれもと注文すると結構な値段になってしまう。

もちろん古来の食文化も変わらずにある。シュムケントのカザフ人のお宅をお邪魔した時には、伝統的なベシュバルマクが羊の頭とともに出された。筆者はトレ（上座）に席を勧められ、羊の頭から耳や頬の肉を削ぎ、分け与えるという伝統的なもてなしの役目を任された。

このような習慣は、以前から変わらぬ伝統的な食文化の好例である。

世界各国の料理を提供するレストランの数も格段に増え、とくにヨーロッパ風のビアレストランや寿司レストランは町の至る所で見ることができる。これらのレストランでは、日中にはビジネスランチ（500 ～ 1,500 テンゲと比較的安い）が供されたり、夕方からはたとえば、2 皿分の注文で 3 皿のメニューをサービスしたり、曜日や時間に応じての飲み放題メニューを設けたりするなど、かつて見られなかったサービス合戦が見られる。また、ピザや寿司のデリバリーも珍しくなく、ポストや玄関にはデリバリーのチラシが日々投函される。

果物の安さとおいしさは、やはり中央アジアならではである。夏のスイカやメロンは、変わらず甘く、しかも安い。流通システムの向上により、かつてはほとんど見かけなかったバナナやキウイ、パイナップルなども安く売られている。冬には、みかんが出回り、多くの人に好まれている。日本のみかんよりも小ぶりであるが、とても甘い。

食生活の変化をさらに挙げるならば、それは飲酒の機会の減少である。かつては、人集まるところ酒ありの感があったが、最近では必ずしもそうではない。家では酒を飲まないという人も増えた。とくに若者の中では、飲酒離れが進んでいるという。趣味や娯楽の多様化とともに、飲酒に起因する諸問題の深刻化、さらにイスラームにたいする理解が強まったことなどがその理由であると思われる。またウォッカよりもビールの需要が増えており、身近なマガジン（小売店）でも生ビールを 1.5 リットルのペットボトルにその場で注ぎ、300 テンゲほどで販売するのには感心してしまい、毎日通うほどであった。ノンアルコールビールも販売されるようになり、酒文化の変化も著しい。

タバコの嫌煙傾向はカザフスタンでも顕著である。タバコはひと箱 200 テンゲ前後から売っているが、そのパッケージの三分の一には肺がんなどのおぞましい写真が印刷されている。カフェやバーの分煙もかなり進んでおり、たとえば氷点下 20 度の中、屋外の喫煙コーナーで喫煙する姿も珍しくはない。

「まともになった」官憲とビザ事情

その他、大きく変化したと感じることは、警察や国境税関の役人の態度である。かつては、いずれも評判が悪く、筆者もかなり不愉快な思いをした。法的根拠のない難癖や賄賂の要求、目的不明の嫌がらせなどを経験した人は少なくないはずだ。日本大使館は、「官憲の不当な金銭要求への対応」のための書類も用意している。しかし、今回の滞在ではそのような不快な思いは一度もしていない。町の中で警官に呼び止められたこともない。また税関の官吏からも理不尽なことを言われたこともない。笑顔で対応する役人さえいた。

その一方で不自由を感じたのはビザ関連である。筆者は、カザフ国立大学副学長のご厚意

により同大学から招待状をいただいて、業務ビザを得て、当地に入った。しかし、6 月に規定が変わったため、それまでの方法でビザを得ることが困難になり、ここしばらくは招待状の不要な観光ビザで滞在している。また、この規定では、観光によるカザフスタン滞在は最高で 30 日間と定められるため、30 日ごとに国外に出なくてはならず、たいへん不便で煩わしい。筆者は隣国クルグズスタン（日本人はビザ不要）に行き、2 か月有効のダブルエントリーの観光ビザを発行してもらっているが、毎月クルグズスタンに出ることを余儀なくされている。

外国人登録についても触れておこう。空路アルマトゥに入った場合、パスポートに二つのスタンプが押される。この場合、外国人登録を行う必要はない。ところが陸路入った場合、国境ではスタンプが一つだけ押され、滞在する町の外国人ビザ登録課 OVIR で外国人登録を行わなければならない。アルマトゥの場合、バイトゥルスノフ通り・カラサイ通りにある OVIR で行う。窓口で書類をもらい、必要事項を記入の上、パスポート現物とパスポートの個人情報、ビザのページのコピーを提出する。これまでの経験では、30 分ほどで登録は済み、すぐにパスポートは返還される。

←ポケモンとある

写真 6. マンガ寿司のメニュー

カザフスタンにおける「日本」

さてここで、カザフスタンにおける日本の存在感について述べておきたい。いまだに自動車や家電製品の品質や人気の高さは顕在だが、実際は韓国や中国の製品があふれている。そうした中、日本の独自性といえばアニメをはじめとするサブカルチュアにある。『ワンピース』や『ナルト』などは若者の間で高い人気を博し、幼いころに見た『セーラームーン』などのテレビ番組がきっかけで日本に関心をもち、日本語を学ぶようになったという人も多い。最近ではインターネット環境が整備され、好きなアニメやドラマの作品を自由に選んで視聴しており、その知識の深さは驚くべきものである。アルマトゥには「マンガ寿司」というチェーンの寿司レストランがあるが、マンガのイラストがインテリアに使われ、メニューまでがマンガの吹き出し風になっているという徹底ぶりで、マンガと寿司という日本の文化の融合を見ることができるのである（写真 6）。本格的な和食を試すならば、「かぶと」や「スモーサン」がよいだろう。いずれも日本人の口にも合う日本食が供され、現地の利用者も多い。

昨 2013 年には、カザフスタンに日本のコンビニエンスストアチェーン、ミニストップが開店した。24 時間営業で、店内のレイアウトはほぼ日本の店と同一。おにぎりや寿司、肉

まんも売っている。高価だが日本の梅酒やウィスキーも販売されている。現在このコンビニは、アルマトゥ市内に 5 店舗展開している。これらの店舗では清潔なトイレも無料で使え、たいへん重宝する。公衆トイレはたいてい有料（30 ～ 50 テンゲ）でそれほど清潔ではないことが多いからだ。もっとも、現在ではショッピング・センターなどでも無料のトイレが増えており、温風乾燥機もついたきれいなトイレも珍しくなく、トイレ事情は向上しつつあるといえよう。なお、蛇足ながら、トイレットペーパーの質もよくなり、日本のものと大差ないようになってきた。もちろん、あのわら半紙のような紙に出会うこともよくあり、トイレットペーパーすらない状況もありうるので、ティッシュペーパーやウェットティッシュの携帯はお忘れなきよう。

日本語学習者の数は一定数おり、カザフ国立大学やカザフ外国語大学などの大学のほかに、日本側からは日本センターで日本語教室が開かれている。また NPO 法人による日本語教室でも多くの人が日本語を学び、この地での日本理解に一役買っている。とくに大学は諸外国の大学との連携を強める方針の中、日本とは筑波大学、名古屋大学、東京外国語大学などとの交流が進んでおり、日本への留学生の数も少なくない。

それにしてもしばしば痛感することは、韓国や中国の存在感の大きさと相対的な日本の影の薄さである。現地の人から「中国人か、韓国人か？」とは聞かれても、「日本人か？」と最初に問われることはほとんどない。カザフ国立大学東洋学部の日本学講座は韓国・日本学講座に再編された。アニメなどのサブカルチュアや自動車、電化製品の浸透度と生身の日本人や実際の日本との間には温度差があるように感じてしまうのである。それと同時に、自身を振り返り、日本の中央アジア研究のあり方とは、日本でなぜ中央アジアについて研究するのかといったことを考えることも多い。ユーラシアの中央部というこの地域を日本からどう見るべきか。これは容易に答えの出ない問いであるが、日本の独自性を大いに発揮できる地域であることは確かであろう。日本は、中央アジアと国境を接してもおらず、また同胞が強制移住されたという歴史ももっていない。日本では中央アジアの認知度は低く、また中央アジアでは日本は概して好感をもたれているものの、その知識は断片的で十分ではない。このような一種距離感がある関係を、逆に利用して、これまでの歴史上のしがらみのない国として、未来志向で人間の姿が見える等身大の関係を構築していくべきであろう。

カザフスタンで活躍する日本人にも触れておきたい。カザフスタンにはおよそ 150 人の日本人が居住するというが、その多くはアルマトゥとアスタナに在住する。アスタナ市のプランを建築家の黒川紀章氏が行ったことは有名だが、氏の弟子筋の建築家が現在もカザフスタンで活躍している。ビジネス関係は商社から個人経営の会社まで幅広くこの地で展開しているようだ。カザフ人と結婚した日本人もおり、日本とカザフスタンとの関係は草の根でも広がっているのは確かなようである。在留日本人同士のつながりももちろんある。日本人会や

婦人会に入会している邦人が集う機会はしばしばあり、2013 年の日本人会の忘年会は韓国料理店を貸し切って、盛大に行われた。男性も交わっての AKB48 に扮してのパフォーマンスはとくに盛り上がった。カザフスタンのような小さな日本人社会では、職種や立場を超えた個人的関係も作りやすいようである。

さて、発展と拡張を続けるアルマトゥであるが、国の中心としてのウェイトはやはり首都であるアスタナに置かれつつある。1997 年の遷都から 17 年。2017 年の万国博覧会を控え、アスタナは国際都市への変貌を目指し、急速な発展を遂げている。その一方で、「南の首都」アルマトゥでは日本企業の駐在事務所が閉鎖されるなど、アスタナへのシフトが明らかに感じられる。とりわけ、日本の在アルマトゥ出張駐在官事務所が 2014 年 1 月 1 日をもって閉鎖したことは、その象徴的な出来事であろう。いまだにアスタナよりもアルマトゥの方が在留邦人の数が多いと聞くが、今後はアルマトゥの邦人保護や領事業務もアスタナで行われることになり、アルマトゥ居住者には不便な環境になる。アルマトゥには、1993 年に大使館が開かれ、2005 年のアスタナへの大使館移転後も出張駐在官事務所が置かれていた。場所は、歴史博物館近くのサマル地区からパンフィロフ 28 戦士公園の近くに移転したものの、20 年間機能していた大使館施設がアルマトゥから消えてしまったことは残念なことである。短いながらも大使館で専門調査員として働かせていただいた筆者にとって、このことはいささかショックなことでもあった。偶然ではあるが、現在私の住んでいる部屋はサマル地区にあり、最初の大使館が入っていた建物からは歩いてわずか数分の距離にある。かつて大使館があった建物は現在 Salem というホテルになっており、その前を通るたびに隔世の感を強くする。

おわりに

現在のアルマトゥの気温はマイナス 17 度。しかしながら、室内は中央暖房がしっかりと効いており、シャツだけで過ごしている。室内はとても乾燥するため、暖房の上に濡れタオルを置いて、加湿している。冬の間、洗濯物は室内干しである。中央暖房のおかげで早く乾く上に、加湿も兼ねるからである。冷たいお茶やビールは欠かせないほど、室内の温度は高く、たとえば、前日炊いた炊き込みご飯が翌朝には傷んでいることさえある。

2014 年 3 月下旬にはこの生活も終わるが、研究においてのみならず、多くの点で非常に勉強になり、有意義な時間を過ごせた。2014 年 2 月 6 日、ナザルバエフ大統領は、カザフスタンという国名を「カザク・エリ」のような別名に変更する考えを表明した。中央アジアの他の「~ スタン」の国々と一線を画し、独自性を強調する意図のようだ。テレビでは毎日、同大統領が提唱する「2050 年までの国家戦略　永遠の国」のスローガンが頻繁に流れる。2050 年にこの国がどのようになっているか、おそらくこの目で実際に見ることはないであ

ろう。しかし、国名の変更案の行方や 2017 年の万博博覧会、現在立候補している冬季オリンピックのアルマトゥでの開催の可否、2025 年のカザフ語のローマ字表記移行など、この国の様々な変化を見続けていきたい。その変化を、今回の滞在経験と照らし合わせて追っていくのも、また楽しみなことである。

（追記）

2014 年 2 月 11 日、カザフスタン中央銀行は、テンゲの対ドル為替レートを 20%切り下げることを発表した。これにより、1 ドルがおよそ 185 テンゲまで急落した。100 テンゲはおよそ 55 円相当となる。上記文中の商品価格やその日本円換算などは、2014 年 1 月のものであることに注意していただきたい。

（和光大学表現学部）